

911.3
ホ

本朝八德集
上下合卷

徳文坊



中野八仙集序

柳子序



世より万能万能といふとよのちあはく
の三徳といふは徳の是とあはくは
是を徳とあはくは徳の是とあはくは
も徳に術のやうに八人徳といひ
七化といふといふは徳の是とあはくは
あはくは徳の是とあはくは徳の是とあはくは

中野八仙集序

抄より人の撰集ある詩とよびて成
らんと書きよき一々書きよき下し能得
る今のいふ及ぶ遠く詩言連
他の情と云ふ近く士農工商高
のいふとあつた類は作向知る者
と云ふ一々書きよき人の初り
百能く生かすものもあつたひは
相と云ふいふものもあつた書きよき

月と云ふものもあつた書きよき
と云ふいふものもあつた書きよき
軒の書きよきものもあつた書きよき
らと云ふものもあつた書きよき
友と云ふものもあつた書きよき
いふと云ふものもあつた書きよき

八仙列傳

詩仙

菅相公

ては天神の湯るる世よかきせり 法皇道實字三
茂原の湯云乃孫衣織是皇の湯也 兼和四年
正月廿日九僕射時平の終ふものごとく 宰府入都
督より侍られさせ給ふ三年二月廿五日既所よたの
菟原の湯於十九と云く今の益圖の詩に盛衛三年
し亥十一歳よりして月夜見梅花といふ歌あり
あり

歌仙

依丸太舟

太史のりる事ありけり 太史のりる事ありけり
湯原小の明玉の湯のほろりありけり ありけり
道後院とありけり ありけり ありけり ありけり
實の湯原のりけり ありけり ありけり ありけり
ありけり ありけり ありけり ありけり
の湯とありけり ありけり ありけり ありけり
墓あり

連仙

宗徳法師

産紀州のり姓ハ三善氏 飯尾ありけり 風雅と
生涯とありけり ありけり ありけり ありけり
出て東野ありけり ありけり ありけり ありけり
て紀行の書ありけり ありけり ありけり ありけり
種玉菴自然社とありけり ありけり ありけり ありけり

と焼ておとせり文亀二年七月相根の湯が不幸と
年八十二世

俳仙

宗濫入道

志那流三神範重とておのの比の武より近江の
國より生れくはは後津の元祐より後徳元徳の
名あり晩年より山崎より徳元徳より宗
濫とてあしう大葉波と撰集せり人なり

士仙

大國未吉

今いふ古國尾州も知郡中村の藩よりて其の母も小
日輝徳よ入りててけり後政小雅名と目吉といひり
いとけれきより英雄の志ありて織田信長といはれり
其存姓と改ていふは國白大政大信小昇進りて

益圖のうふ田原就陳のと紀勢田とての白りり
武士の風雅なるなり中よりけり大將小能信の法は
あり

農仙

菅原捨

捨は丹波の國を東とてふ所の百姓の姓とてあきらま
風雅の字ありりれしとて東よりあきらまを家名
とてふなりとてその他洞よりをいひて世を
のほの盤珪禪師小ほえとて自用といふたよなり
より白地新門寺小姓をせりといふなり
人よそ奇書の字小あきらま

工仙

鶴 敏矩

双紙笑宵寝 而味過莫在梅

歎

假名用真名韵

岸昨在表

世と空深れ困うは不知草ゆるじも死床兒
筆ふらぐも浅くら長糸角とほらふはひの莫為

柳

假名用万葉韵

張昇角

朝白の目のけささる霜 せとつらとちのに花はる場
影もほろひたせいれ知 有明の月のたふゆる香

木

假名用天和韵

苗案陀

老の朝日れ障きうらうく 翁の雪も春成りしらひ
軒より梅の香もいよとよ 火櫃桶の炭も香はうらち

後丸を更

いさるるいらりあけなれやもりたりふ
もらちのをらりか桶とらちの花

神祇

渡吾仲

月と花もさあはらふらん海人の

おのゝめはゆき神やうらみん

釈教

江守坊

念佛の道理をきいて曉乃

水鶴とやまもあうたはく也

痕

陳素六

分眼者の恋して物とらふら

秋乃秋とやあふあうたはく也

無常

張昇角

炭高貴の都の人ふあうたはく

一はよかなる男や言ておの

宗祇法師

あはれもあうたはく

美

五方堂

老の波はまゝ心海や花の陰

子紀

長中翁

櫓のうづりざらわやうゝ夜

月

永宇中

月をひら川新百巻れを紙か

香

張昇角

おとせきあてや竹よねの智

宗澤入道

月より梅ささりまゝは結うらむ

草餅

川乙由

けさハ餅ははるねて花さるる

冷麦

石隆夜

冷麦や日け乃智あゝの南系典

新蕎麦

張昇角

新蕎麦はや伊吹おろしふまの帆行丸

河豚汁

東免士

鱧汁や一海入りしてよいかん

大園秀吉

小田原やたよこの海ぶ新あせ

鰻物

江山隣

ろよりのと稚子まじりやゆき将

刺身

海巴分

川物や体たかき若ひらりおと

草物

張昇南

草物や蹄豚の端の提ちりひ

雀鳥物

山崎彦

雀鳥物の手ぬり養とに似て

菅原信

粟北極乃
神皇正統記 身なるものなる

苗代

藤蘇守

苗代や延はゆ代

雨乞

張昇南

雨乞の業と善なるもの

先見

徳大毫

西白の毛目や花らり

年貢

後右親

馬子の足廻りし心年貢

西鶴敏矩

傘ふのりゆたをきや

三月

張昇角

法もくまよまといつてふて常徳うか

葛蒲

佐藤山

さい極ふ及つ極軒のあやうか

啄木

伊東悠

本法もまやちのふも染小袖

煤掃

お法もて棚のまもも煤らぬ

雛立圃

斗着もかろやあらん 兎はら

蕨田

城嵐校

花よりも餅ふひらや下も花

糸

井草吹

高人の尾は花の咲くまうら

二百十日

深井角

新米よ代わりのや風の神

あは頂儀

六七里

あは頂儀 朝のあはりの 本意うか

集梅儀

梅よりを一杯白く 米の合

東流下

巴静

豆麻法衣の窓ふ永日

昇角

雛形の二十四まふは夜中しらて

尤把

京一夜の風吹くなり

流辛

清之原のりりちり初ま

比誰

年まのりき腰よ 靴草

杉夫

川部ら中ふら合ふ月の夜 百栄

春風の城こゝろふさふさる時
静

泣き声も見ぬのふり
角

有るまじくもねらふ
把

かたむき給のふれは様なる
辛

氣とりを樂む園
誰

金と分わり一年の同
夫

さらにもはまに今も
角

男の子は口づか
静

一
眠るひつるいやな
角

花も皆下寺断る
把

廿五丁の程の
辛

二
る笑よも綿の解も
誰

若き徳の怪我の
夫

伊勢の園と申る
角

石のうらな
静

照磨ははる
角

借金の自方よ綴よきまじ

把

鋸屑と一俵寄つて分らなり

辛

田のあれと麦の障りな

誰

手細の被伝し縁違はるけ

夫

かきこころしあまじきる

榮

若湯れりきもけり風月

靜

昌の茅とよつる山産葱

角

^名初りしと路ふ列とむら蒞

把

あさひの元と子平候

辛

吾風景しんなも紙と前

誰

何一軒さて喧の 佗言

余

美とあるたの智あふ果しな

夫

離こころしあまじきる

角

寄^ス梅^ニ佛

長安坊

線香の骨^ニた^シつら^ニや^シの^花

三逕

加^テ香^ニよ^シひ^ク村^ノ花^ノ一^枝

昇角

かけ^テは^らふ^もち^りく^もさ^しよ^の提^テ

巴菴

ち^りく^もさ^しよ^の提^テ

傘行

の^花も^眠ふ^もち^りく^もさ^しよ^の提^テ

阿文

菊^ノ様^ノの^道か^くく^も

其考

歌^よふ^はい^はは^らる^る花^はと^月の^影

試中

浪^よふ^はら^るる^る花^はと^月の^影

連

小豆^餅も^ちり^くも^さし^よの^提

角

柴^のか^かん^て松^の花^の

荏

童^幼れ^使ハ^半も^ちり^くも^さし^よの^提

行

又^物を^もち^りく^もさ^しよ^の提^テ

文

え^せし^とそ^の花^をせ^つめ^らふ^はな^をこ^の

考

小^神を^もち^りく^もさ^しよ^の提^テ

中

青清ふよまの子は獲と持し

くちの住しつふ守るを言

一物の出道とてむら雲

まをいあをいあをい

二茶碗て六雛の述利の鏡

あふて言ふ言ふ

縫物の中ふの厨事とて

十二箇れ年とて

角

角

角

角

角

角

角

角

なぬしと持来は服之を

内着の衣へりりて

任玄のやう不持をす

わよとてまて猫は

も蓮もあつひおのむ

安んぬるの夕の宿

蘊栴てかすめて茶権の

あまこめもいんち

角

角

角

角

角

角

角

角

なぬきしん 将泰の藤之巻

内巻の巻へりりて田木

任公のやうふ持をす若而常

竹林のわよとくまうし猶は聖皇

也蓮もまつひね月のむし居

安人の尚さひく夕魚の宿

蘊栲てかきしそて茶室権の山邸梨

あまのめまも凡ちちさ也

角

雀

行

文

考

中

送

角

寄梅神

八仙觀

うらひすの影や鏡よむかしの花

昇角

砂よ胡蝶のあはれ常目

麦土

離の月を便り鬼の住書く

草平

雇人なれとさうぬき也

涼三

味増ほさふ存持くさあおあな

士

夜あのをつくとさ丁よそのま

角

名

面根首のまがらふ鹿さくし

梅をてふまよぬるまをたき

むほきうに我竟福ゆる半たき

守りよふまよのひくねる

か林の花にまきえの書所

あまのあつらふまきる

荏

行

文

病

中

角

あまのあつらふまきる

寄梅神

八仙観

うさぎの影や鏡よひぬる花

砂よ胡蝶のあまき帯目

離の月を便り鬼の体書く

雀人をれとくまをたき

味増はさふ存持くまをたき

夜あのをつらふまき

昇角

麦土

草土

涼三

土

角

一花のついでに花のついでに花のついでに

西す拍子よびふらりと指合

探ねとて梅のついでに花のついでに

茶の湯のついでに花のついでに

志らくぬと時雨のついでに細月夜

須のついでにちとれぬのついでに

色あやふついでに花のついでに

花のついでに花のついでに

三

平

角

七

平

三

士

角

名

秋朝の花も唐とくらひたり

三

赤くす枝も梅のついでに

平

常のついでに花のついでに

角

放下のついでに花のついでに

士

下物のついでに花のついでに

平

身も花も花のついでに

三

四季子後白

春後

君らたの味留とくらふよと春後

春後坊

袖のまじりもさしはるる春後

小枝

かけ後あまのあはれぬ花

桃化

夕のや浮世の世らの後

秋坊

後かゝ路もふりもり

巴靜

灌佛や庫裡の籠のこゝろ

心蓮

六所のし思くや花のあ

昇南

畑中の花もさうさうけり

幸名 牛湖

まの日に衣あけり 桃の花

杉夫

桃のく離んふまや市女

里紅

草のまじりもさしはるる

湯之

桃の花はくや花氣ふらふ

百花坊 除風

あまのまじりもさしはるる 桃の花

伊勢 冠士

待はらりれりもさしはるる

長濃 東羽

六所のしるしや花の美

昇南

畑中の花はさうさうりくれ

幸在 牛湖

夏の日れ衣衣の 桃の花

杉夫

桃のく離んふまや市女

善法 里紅

花のく少くの隣そのとり

百花坊 池之

桃の花はくや花氣ふい

伊勢 除風

あはれともふもふも 桃の花

美濃 苑士

待はるれらも花も

美濃 東羽

ゆらりたる花の香はけしき梅

敦賀 東郷

三月のふゆひてはら 暮木まき

伊勢 茂秋

三月と折くもあつさう麻

奥津 大凡

訪ハ仙観

四市

あつさうけ奥涼 忘れ風

大寺寺 王之

ねよ吹く風はまてて 実伝る

高岡 其枝

一國成をまてて 紙懐か

高岡 鉦之

舟をたのむもあつさう 紙懐か

昇角 甲崔

新花とてをまけたるのり

全次 巴崔

あつさうのひもいと併

伊勢 兼輝

追分やあつさう 枇杷柳

伊勢 風野

離よ酔ふらや 枇杷の一年

杜亮

石のうへをまけたるひいふか

長濃 恭士

縄戎右を園をふらさる 兼輝

長濃 駒航

手習とてまてて あり初あま

馬坂

府後とてまてて 鹿の山あま

大籠

新體世を以て當れたるものなり

巴菴

當れたるものひらきいし

全氏

著彈

追方やあけりよまふ

侯坊

風野

離よ解ふらや

杜亮

石のさしをいふ

善濃

藝士

繩戎者を固く解ふら

蹄航

年習とよむ

日

馬坂

府松とよむ

日

太範

山は静かにあそびてねむるは花
赤井

風とくく笑ひあがり蓮の心
移夫

松風やあふるゐりてとよらるん
大正寺
風雲

春風のまよひ吹あつて故に成
富市
左菊

川下は燈籠ごとくやねあつた
伊勢
伽竹

地もはたは天もは地ぬ柳ふら
笠南

雲の心を埃のわけさる晒うね
金沢
梅里

麦渡のしるしあやねぶの月
梅橋

羽二重に袖かひのころ 桜式

福井

玄駁

蝶の目や思ふも思ふもしくか蔵

高岡

素石

酔ふ時を思ふのころやなれ花

本吉

半膳

蝶をたかしく雨の雫や桜樹の花

伊勢

曾小

子と寐せし時を思ふに雲うる

座中

喜吉

蚊ねやあゆむ死なまのころ木立

奥津

伸鼓

蚊を火のまきまき思ふに雲うる

巴湫

岸の花のうつろや 鶯一羽

詩中

山の中はあやうきとてなれまはれ花

赤井

風とくさし思ふあり 蓮の心

杉夫

松風やあやうきとて思ふに雲うる

大正寺

風雪

春風の子とて思ふとて思ふに雲うる

富市

左菊

川下は燈籠とて思ふに雲うる

伊勢

伽竹

地もはたけ天女とて思ふに雲うる

伊勢

笠南

雲の名を埃のわけする 晒し花

金沢

柳里

春風のうしろや花は二月月

梅橋

梅橋

昔の恋の心も細く竹の月

井波

林紅

昔の恋の心もよもや恋の心も

石動

五夕

三昇もあつてまじぬ物も縁の

新

琴洲

元日の春ふこ百枝榊の如

紫雲坊

北皆

只何の世のそねあつたの柳のな

龍見

李仁

うつくしやうしやうひらふ世は

金沢

十林

うつくしやうしやうひらふ世は

金沢

蹄角

跡もよもやうしやうひらふ世は

修琴

昔の春ふこひらふ世は

水鏡

路青

昔の春の娘の心もよもや

梨隔

おしめは順礼あつた世は

知後

雲谷

おしめは順礼あつた世は

吉神尼

夕湖

おしめは順礼あつた世は

富山

界角

若得の湯あつた世は

高岡

浦淡

おしめは順礼あつた世は

福井

主可

おしめは順礼あつた世は

韋吹

常の祥ふらむるまらぬれ

水見

路青

菅皇の姫のいさふ榮福ふ

知多

梨隔

子し女は順礼あつるまらなり

志神尼

雲客

秘伝よまじつあそて回柱る

夕湖

かげらふかまもるる春ふ

富山

界角

若得の湯身より春むむら

高岡

蒲次

花さくははひらぬるれを春む

福井

主可

ねらふる鏡も塵ふ

鳴るを春

草吹

喜の水いづみのうみのうみのうみ

哉中

方登

小神こがみのうみのうみのうみ

秀丸

清きよのうみのうみのうみ

風野丸

紫蝶

川かのうみのうみのうみ

二十

曾丸

初はつのうみのうみのうみ

且茶

三千さんぜんのうみのうみのうみ

大寺

馬泉

糸いとのうみのうみのうみ

木吉

石推

石いしのうみのうみのうみ

竹夜

田たのうみのうみのうみ

昌市

糍也

蓋かきのうみのうみのうみ

石動

香鴉

鑑別

卯うのうみのうみのうみ

曉吾

名なのうみのうみのうみ

昇角

櫻さくらのうみのうみのうみ

福光

拂士

蝶ちょうのうみのうみのうみ

肴中

嵐板

其そののうみのうみのうみ

石動

藤徒

李夫人の化して存問の牡丹

奉母

千之

高麗の白牡丹の牡丹

奉母

潜耕

竹守の無能よらさほくん

高岡

五率

一の宛ある椿の下踏の音

谷次

為町

猪口笑の才ふを海に椿か

生

我因

出智のや名にまふりしあてり

拂翠

日宮中の目ぐる唐のあてり

香計

そまほらららら二月深繁像

日昇角

西のいとやまのあてりはゆき

奉母

清八

百のひや、狂を啼とく二重あ

一湖

有ののりたむさるや啼一蛙

法所

吳名

禊のうらけりて痛むとや花の音

可及

鐘のひやあはけりや美日雲

何有

海ぬきやぬきのくくく旅心

高岡

唐舟

空飛やびよる物味有るよ

禊

山流

空を舟を海せとるまあり

け史

東名

西のひとまゝよあつちかへはゆを

清八

るふひや、魁を啼とく二重田及

一湖

法所

有ののりたむるや、啼一姓

吳名

宣市

禰よらのうけて禰よとわ花の名

可及

桑名

鐘のやあゆよほつちや、暮日雲

何有

高岡

海ぬまをぬののくくくろ旅心

唐舟

福井

を龍やむよも物を味有まよ

山流

茶も丹を海せとるまあり

辻史

山吹花を流く又六所

和名

洞石

路を見ゆる山の流くは雛の姿

四甲布

竹島

川よりとびに舞ふりありは月

桑名

桃五

新馬の埃くは子の黒き丸

金沢

山竹

首乃葉よこしはあはれ

由之

由之

雪とらり雨やハナハナ

府中

則史

凌霄の黒きや北村の春

栗木

栗木

出女の麦はくじや美標

昇角

尾城小十論の虚実と

愛ありて四月朔日

古く小婦らしとて

更衣よ尾とらりはあはれ

蓮房

食の糞乃蓋よすうねや衣更

糸真川

九舛

猿の子のすこえはあはれ

石動

帯的

五月の尾と出はあはれ

城端

寸長

八月の尾と出はあはれ

宇木

宇木

繩冬

麻乃音れとぬしりきし
し由

臨りけくまふも麻乃音れ
宰地

福書あやまのせひりふふ善のと
昭襄

好風もくこ音くまふたしこ
昇角

好風は舞ふ夜やふらの迹
九把

秋の香や袖味あふふ
其考

清きものよき

山橋

新河

此様

鼻よりふ湖の心よ

昇角

笑く花ふれも

素名

休山

海ぬきや

昇角

しるぬきや

巴静文

木四

いさねと

貞静

そよれ老や

京

吾仲

繩冬

麻乃音れ

乙由

臨りけ

宰院

指書あや

那養

好風も

昇角

鯉魚は

九把

秋の香や

其考

志願の園はさくす 年比 松 麦が

る彼のちのうは ありりり成

る日成とせぬ実ありる彼の雨 祖月

おろろふ日とねは波志をぬるか 大毫

錦おの音ありの雪の落るの夜 山隣

ふ葉およ ちうりうとてはた

あふぬくを指らうり合はちるお葉 蓮三房

お葉りんと細くあふ寒をうら 養濃 吉重平

け奥成麻よまのぬる紅葉が 白 六之

とみかららるる意うらふのをうら 白 東波

焼松を少きの下のさむじうれ 藪賢 芭舟

竹を木味て梅よりもあはれ 馬場 素木

室よ木味く悟ひのやむいあみ花 石動 幾全

枯きらのやんちをそのく秋の旅 三回 し普

祖苑やほの隅くはらあま 大正寺 金英

秋風や首よまふ腐の思あり 魚津 菊七

菖垣の若明を子かきを尻

四日市

桐水

蓮の宮成明くや蜂の穴を

菖水

船記のふとふちて啼うる

長雨

風よらまよるれれ射るる

朴人

葉の目やゆへそちてあめ月

眉泉

雪れ目や出智村のこころを

東羽

清くは紅の紅雪や鴨の姿

池霧

夕合る詠を新よ似る鴨の声

竹夜

素の葉もくさくさ今と秋 越前 虚白

あけの都は後とてあふ 泊 巴静

結もまゝ根深とまゝ 泊 松守

移はるゝの其白とせぬ十夜 金沢 昇角

極赤も地獄も 金沢 相之

昇角子の
葉店よ

夜をふも 比由

月や竹ささの月の園 牛久

菖畑の若明を 四日市 桐水

蓮の宝成明く 七尾 松水

船記のま 七尾 長雨

風よ 松 朴人

葉の目や 石動 眉泉

夜 大正寺 东羽

池霧

竹夜

ねむり味暖まる音よ響るぬ 昇角

あさる白や遺言状の二書 三画 伯免

あさる白や遺言状の二書 大正寺 馬紅

朝顔の坪越一草の起り 四日市 席芳

ねむりやふらふら 城端 九江

あさる白や遺言状の二書 火見 宜之

夕くらり方の響き 日 俣村

深積の二の法 津を月 海峯

羊の集り 小松 大正寺

羊の集り 魚津 貞子

那谷の観音小清く

夕くらり鏡の角 大正寺 虎角

中流や常の依袋のやぬ 生地 菅五

細法 細石動 可省

二月月も 昇角

星のたや 百葉

桐生は日守山とて天の川
照るに天守の如き高
妙の空に瀟々神も舞不蝶
蘇鉄に玉散る如く水も風
如く舞ふ如く空の如く舞
名月如く舞ふ如く行便宜
空文の空に送る如く月
空の空に送る如く山

魚津

雨村

尾

目端

生地

枚中

官言

北之

雲

舞

白羽

偏山

前群

採

磯道

蘇鉄に玉散る如く水も風
如く舞ふ如く空の如く舞
名月如く舞ふ如く行便宜
空文の空に送る如く月
空の空に送る如く山

福井

標

賢

津

唯人

風沙

舞昇角

舞

舞

地

有

蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書

伊舞
已覽
蘇道
涼直
南湖
如亮
巨部
琴橋
素蘭
丁類
施祀

蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書
蘇子瞻與張文潛書

七尾
蘇道
素蘭
丁類
施祀

遊んで遊んで遊ぶゆいこまうらら

鳴海

白真や浪のあらさふ夕日影

中瀧

お真や葉の花咲く濱のあはれ

玉之

如真れ海やまゆり花のあはれ

昇南

赤青と葉せよけりや葉のた

大正寺

田之

葉の音れくさあはれはの月

果積昇南

用由

秋空成一日路空しく後此月

墨侯

風自

る月よ照りまきて星のまはり

兼名

正葉

木し浅路よりり岸の松

豊田 辨

潮は花の心よりちる木の葉

全 古淵

ぬのかよ化しよしや神和

高岡 互越

傘よのち傘よさる師を公

和泉 呂仙

おのをと枝よ志の川虫の声

以

傾城のがこころいこるあはる

敦保 季和

吹流る指の若やかしこ

中河

ちる射るるともものむ花の花

昇前

遊んで花をぬきまうら

全

白鳥や浪のあらふ夕日影

鳴海

中淵

お鳥や葉の花吹く濱の波を

玉之

鳥の海やまゆらけの波

昇前

赤青と葉せよ花を葉の心

大正寺

田之

葉の音れくおあはるの月

昇前

秋夜成一日路を後此月

墨侯

風自

る月よ吹くまそそまのち

来名

正集

竹より森もたけの落葉ふりれ 水見 巴流

焼淨とやういふやを木立 志尊

鬼好のてねふまねや冬の栞 三箇 角呂

病中吟

いよほほりるもや生れたのさういふ 二人 漢定

辞世

紅何の月とらふてあはれ 道 平秀

奇のあはれ 美濃 小倉山 江口

紅秋やねむいふの 福井 みやけ 内只

ねむいふ 七尾 倚彦

物ふく 和荆 杖海棠

深空 出羽 のまや 柘角

念拂ふ 昇角 ちや 大橋川

畑 全 のま 麦の香

雨夜 雨の麻

傘 蓮房

山宮ふくむ浪若さの海の家

東

別荘

後の見ふはしらの岩や種族山

涼三

み成や寝たりのひてをのれ

方堅

蔵の糸とれてふ秋の雲

子川

二百十日一日のうらまゝあり

七里

持主とてよるふ秋と一志くれ

涼鬼

鶴の泣くはまの川

見龍

初宮のあけの寐えぬと

金沢

獲守

かゝるぬのさくら 岸の沙

細代守のさくらにやうし 新が

森の ちのちのさくら

常の葉とさくらやみ

けとや沖よらの帆くけ

祖父を祖母の泣きふくの書

木因

初宮の御あけほの寐え申と

金沢

獲守

かゝるぬ風は是れなり 彦乃少 江 百里

細代守のそらにすらし 斬る 三選

森原 い 身いしよりとみそさる 櫻葉

常此菓と申すやみそさる 界角

けと や 沖よふの帆うけ 芭蕉

祖父を祖母の泣きふく の 書 木因

跋

和之の流法りの化々のの櫻馬ちれ
とせられぬ必ありれあし
語流とも大倉やよしのり世集の
八人集の流のあし
しみ流写せむは品布よ山板の茶
まうりよもあしは例よああらぬ
仙男仙女とえりひよさるるく

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

德意志銀行
德意志銀行

專係平

六月
德意志

德意志銀行
德意志



德

